

自分たちで考え、判断・決定し、行動できる児童を育成する学級活動

—学習サイクルに基づいた係活動と学級会を通して—

今井 紀恵

(教職リーダーコース E223C002)

1. 問題と目的

(1) 現代に求められる力

2006年に経済産業省が発表した『社会人基礎力』は、2017年度に『人生100年時代の社会人基礎力』と新たに定義された。三つの能力と12の能力要素を内容とし、主体性や実行力、課題発見力などが含まれている。このような資質・能力を身に付けるために、初等中等教育の段階で意識すべきことも示され、学習指導要領とも関連が図られている。

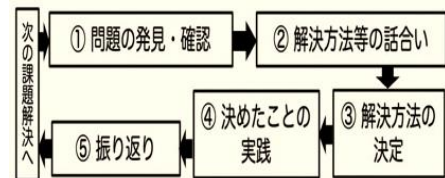
(2) 勤務校の児童の実態

主体性や実行力、課題発見力に関わる質問項目が設定されている令和3年度全国学力・学習状況調査の結果から、勤務校の児童は互いのよさを生かして解決方法を決められていると感じている一方で、解決方法を決めても実践できていないと感じている実態があった。

図 1-1 学習サイクル

(3) 目指す児童像

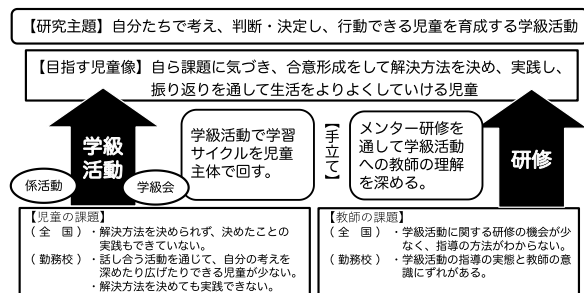
本研究では、『自ら課題に気づき、合意形成をして解決方法を決め、実践し、振り返りを通して生活をよりよくしていける児童』を目指す児童像とした。



(4) 目指す児童像を実現するための手立て

特別活動の学級活動の実践に焦点をあてる。「小学校学習指導要領解説 特別活動編」に例として示されている学習過程を本研究では「学習サイクル」(図 1-1)と名づけ、学習サイクルに基づいた係活動と学級会を実践することを手立てとして、目指す児童像に迫る。また、メンター研修で実践内容を取り上げ、校内への周知を図る。研究構想図は図 1-2 のように設定した。

図 1-2 研究構想図



2. 実践

(1) 予備実践 2022年度

置籍校の5年生で係活動の実践をした。「小集団での合意形成を図りながら、計画、実践、振り

返りを通して、学級を楽しく・仲良く・賢くするための活動(佐藤・西尾, 2020)を児童主体で行うこと」、すなわち児童が小集団の中で学習サイクルを回すことをねらいとした。主な活動は係活動と当番活動の違いを知り、係を組織する(学習サイクル①)、係活動を実践する(学習サイクル② ③ ④)、他者評価を基に2学期の係活動を振り返る(学習サイクル⑤)とした。

一連の係活動を取り入れた結果、児童からは係活動を取り入れる前より学級の雰囲気よくなり、学校生活が楽しくなったという意見が挙げられた。また、担任からも学級の変化についての感想が挙げた(学級が楽しくなった。休み時間を1人で過ごしていた児童も友だちと関わって活動し、全体の前で発言するようになった。)。係活動の導入は児童だけでなく担任にとっても学級経営の面でプラスに働いたと言えるだろう。一方、係活動は児童にとって新しい活動であったため、予備実践では学習サイクルを児童に示さず、教師からの指示で計画や振り返りなどを進めた。そのため、活動が教師主導となった実態も見られた。児童主体で学習サイクルを回すためには、児童が実践内容だけでなく学習サイクルについても意識できる支援が必要になるだろう。

(2) 実践 2023年度

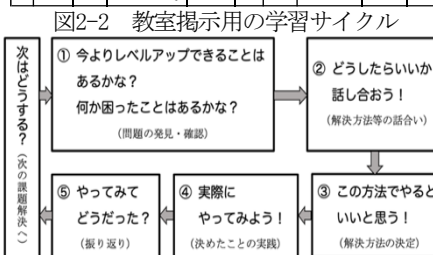
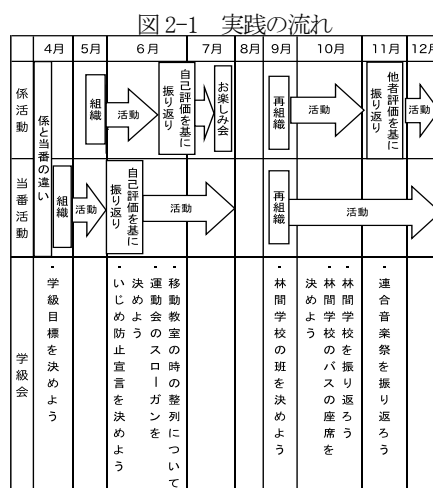
図2-1の流れで実践を行った。学習サイクルは児童にも分かりやすい言葉にして教室掲示した(図2-2)。

児童の実態 5年生の1学級30名(男子13名、女子17名)。

学級の児童はこれまで話し合いで物事を決めてきた経験が少なく、教師からの指示で動くことが多かった。そのため自分たちで活動を決めて実践するスキルをもっていなかった。この実態から学級会で全体支援・指導を行い、それらで学んだことを係活動に生かしていく流れとした。児童自身で学習サイクルを回して、自分たちで判断・決定し、実践していくを通して、自分たちでよりよい学級をつくっていく経験をするのが、児童の成長につながり、目指す児童像に迫れるものと考えた。

①学級会 学習サイクルについての全体支援

学級目標を決めよう 5年生の最初の時点で児童が自分の力で物事を決めることができるのかを見取することを目的に、学級目標を決める学級会を行うこととした。担任は学級目標を作ることを司会者となる学級当番の児童に伝え、どう進めたらよいかを相談した。ロイロノートに全員が提出した学級目標に入りたい言葉を基に4～5人の班で話し合った後、全体で意見をまとめて学級目標を作るという流れを学級当番が考えてきたため、その流れで進めてみることにした。なお、この時担



任は学級当番に「多数決以外の決め方はないか」ということを伝えていた。本時では、学級当番が作ってきた司会原稿を基に、多数決の手段に頼らず話し合いを進めていた。

【学習サイクル：① ② ③】移動教室の時の整列について 6月上旬に「課題はチャンスである。課題を見つけて、それを改善して学級をよりよくしていこう！」と話し、課題発見カードにあたるチャンスカードを教室に設置した。本議題は、このチャンスカードに書かれたものであった。話し合いは担任が解決すべき課題を説明した上で、学級当番である2人の司会者を中心に進めた。行動の仕方に関する議題だったため、解決方法を一つに決めることは意識せずに話し合いを進めた。

【学習サイクル：⑤ ①】連合音楽祭を振り返ろう 学級全体でGoodを確認し、Mottoを出し合った後、各班でMottoの中から一つを選び、改善策を考えていく振り返りを行なった。この時、「Good」とは連合音楽祭の練習から本番までの取り組みでよくできた点、「Motto」は改善点であることを説明した。本時の児童の話し合いは、的を射た話し合いであった。各班の話し合いで決まった具体的な改善策として提出した意見を学級全体で共有し、より具体的になるよう質問し合う時間をとった。その後、全体での合意形成を図り、卒業式にはどのようにするのかを学級で決定させた。

②係活動・当番活動 学習サイクルの実践の場

【学習サイクル：④】係活動と当番活動の違いを知り、当番活動を組織する

4月当初、5年3組の児童は当番活動を係活動と呼んでおり、自分たちで考えて係活動・当番活動を組織した経験がなかった。そこで、まずは係活動「学級を楽しく豊かにするためのもの」と当番活動「学級を維持・管理するために必要なもの」の違いを伝え、学級を維持・管理するために必要な当番を自分たちで考えることから始めた。また、当番活動を組織した際には学習サイクルを提示し、現在意識すべきところ(学習サイクル④)について説明し教室掲示した。

【学習サイクル：①】係活動の組織 学級の児童が当番活動に自主的に取り組めるようになったため、係活動を組織することになった。本時では児童が一人一人考えた係について『学級のみんなを楽しく・仲良く・賢くする活動』の何にあたるのか分類しながら黒板に貼っていった。話し合いの結果、五つの係を立ち上げることが決まると同時に、担任がコンサル係を立ち上げることを公表した。

【学習サイクル：⑤】自己評価を基にした係活動の振り返り 係活動のルール『学級のみんなを楽しく・仲良く・賢くする』を確認をした際、児童から「楽しく・仲良く・賢くの最初の文字をとって、たなかさん！」との発言があった。これ以降、学級では『たなかさん』と呼ぶこととした。

その後、自らの係の課題を話し合った。これらの課題を改善する為に、1学期末のお楽しみ会を計画・実践していくことにし、本時の中で計画を立て、それを学級全体に向けて発表した。

【学習サイクル：①】係活動の再組織 児童全員の希望により2学期の係活動を再組織することとなった。1学期の様子から、係の人数が多いところは話し合いを進めにくい、活動が人任せになると

いう課題が挙げられ、話し合いは一つの係の適正人数についてが議論の中心となった。話し合いを経て、2学期は3～5人で一つの係が組織された。

【学習サイクル：⑤】他者評価を取り入れた係活動の振り返り 学級のみんなから各係活動について『たなかさん』の視点で、できている点（Goodたなかさん）、もっとやってほしい点（Mottoたなかさん）を挙げてもらった。それらを担任が集約して係ごとの振り返りシートを作成した。複数のMottoの中から一つを選択し、それについての改善策を話し合った。各係での話し合いでは、個人で改善策を付箋紙に書いたものを持ち寄り、意見に質問や付け足しをしながら具体的な改善策を決めた。

3. 検証

(1)学級会 児童が司会をして進める学級会では、まだ話の軸がずれてしまったり、一面的な見方のみでの意見に偏ってしまったりすることもあるが、学級会の最後には、児童が意見をくっつけたり優先順位を決めたりして合意形成を図り、結論まで辿り着けるようになっていった。だが、司会者、書記など全てを児童が担当しての学級会はまだ成立していない。

学習サイクル①～③の場面では児童の変化を感じた。課題はチャンスと伝えた後は、課題を見付けることに抵抗が減った。また、解決方法の決定の場面では多数決に頼らず、話し合っただけの折り合いをつけることを学び、決めたことを実践する様子も見られた。このように、学習サイクルに沿って学級会を進めたことで、自分たちで判断・決定し、それらを実践しようとする態度が育ってきた。

(2)係活動 係を組織した当初、児童は4年生までに経験した範囲内ではアイデアが浮かばず、活動の広がりが見られなかった。そのような状況の中で、担任は各係の相談に乗り、児童がやりたいと思っていることをできる限り実現可能な環境に整えて、活動の内容を一緒に考え、活動した。2学期になると、係活動が停滞している時期であっても活動を進める時間を設定すると意欲的に話し合い、自主的に学習サイクルを回そうとする姿があった。2学期の後半には、振り返りの時間を設けると児童は具体的な改善策を考え、それらを実践できるようにもなった。

教師が振り返りや課題発見の場を設定すると、児童主体で学習サイクルを回すことができていた。だが、全てを児童に任せると実践が停滞し、振り返りや課題発見に積極的に取り組んで学習サイクルを自ら回す姿は見られなかった。児童自身で学習サイクルを回していけるようにする必要がある。

(3)学習サイクルの理解と定着 学習サイクルを活用して、目指す児童像にどれだけ迫れたかの検証のために、5月と12月に児童に対して質問紙調査を行なった。調査結果から学級全体に対しての質問では、5月の得点よりも12月の得点の方が有意に高い傾向を示していたり、統計的な差は見られないものの数値が上昇したりしていた(表 3-1)。学級全体として数値は上昇しており、学級の中で学習サイクルが回っていることを児童自身が意識できていたことが示唆されている。一方、個人については5月と12月の間で統計的に差が見られた項目はなく、学級全体に対しての質問と

比較しても、数値の上昇幅が小さい項目や得点が減少している項目が複数見られた（表 3-2）。学級全体として、学習サイクルに沿って自分たちで判断・決定し、実践して振り返ることができていたという認識がある反面、個人については現状で満足せず、もっとできるという気持ちの表れではないかと考える。

また、12月の質問紙調査と同時期に、児童に対して「学習サイクルに関して思っていること、感じていること」を尋ねた。児童からは、課題が自分たちの成長につながる、学習サイクルの掲示は次の活動がイメージしやすく、課題解決をする上で有効だったなどの言及が見られた。

表 3-1 児童への質問紙調査の結果（学級について）

	①問題の発見・確認	②解決方法等の話し合い (様々な意見や考えを大切に しているか)	②解決方法等の話し合い (意見を話し合っているか)	③解決方法の決定 (話し合いで決められるか)	④決めたことの実践	⑤振り返り
5月	3.25 (.84)	3.39 (.79)	3.46 (.64)	3.18 (.77)	3.18 (.77)	2.89 (.83)
12月	3.50 (.64)	3.46 (.69)	3.43 (.69)	3.25 (.70)	3.46 (.74)	3.57 (.79)
t検定	t(27)=1.89, p<.10	t(27)=.63, n.s.	t(27)=.23, n.s.	t(27)=.42, n.s.	t(27)=1.49, n.s.	t(27)=3.80, p<.01

表 3-2 児童への質問紙調査の結果（個人について）

学級生活の中で、自分のやるべきことを自分で見付けているか。	①問題の発見・確認	②解決方法等の話し合い (様々な意見や考えを大切に しているか)	②解決方法等の話し合い (意見を言えるか)	③解決方法の決定 (みんなの意見を生かして、 決める方法を知っている)	④決めたことの実践	⑤振り返り
5月	3.32 (.82)	3.29 (.90)	3.25 (.84)	2.93 (1.15)	3.14 (.80)	3.11 (.92)
12月	3.32 (.77)	3.14 (1.01)	3.29 (.71)	2.68 (1.12)	3.07 (.81)	3.29 (.94)
t検定	t(27)=.00, n.s.	t(27)=.75, n.s.	t(27)=.27, n.s.	t(27)=1.13, n.s.	t(27)=.49, n.s.	t(27)=.39, n.s.

4. 考察

(1) 成果 学習サイクルを掲示していたことで、児童にとって学習サイクルが身近なものになっていた。活動をしたら振り返りをするということは児童の意識の中に根付き、その振り返りから課題を発見していくということも定着した。

(2) 課題 学習サイクルとしては定着したものの、教師が学習サイクルに沿った活動の場を設定しないと回せない状況ではある。教師が活動の場を設定しなくても児童自身の力で学習サイクルを回して、生活をよりよくしていけるようにしていくことが課題の一つである。また、合意形成の方法の選択肢がまだ少ないので、今後、合意形成を図る力についても強化する必要性を感じている。

引用文献 国立教育政策研究所(2021). 令和3年度 全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査

<https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/report/question.html> (2024年1月10日確認)

佐藤洋一・西尾一(2020). 特別活動の指導法における「三つの視点」と学級活動-係活動の再構築による資質・能力の育成- 名古屋学芸大学 教養・学際編・研究紀要, 16, 21-33.

文部科学省(2018). 小学校学習指導要領解説 特別活動編 東洋館出版社